

—ムーブ叢書—  
北九州市の男女共同参画統計データ集2014



■ 北九州市立男女共同参画センター 編著  
■ 北九州市立男女共同参画センター 発行  
■ 2015年

『北九州市の男女共同参画統計データ集2014』は2008年に作成されたデータ集の刷新版である。最近でこそ、国の主要な統計データはe-Stat(日本の統計が閲覧できる政府統計ポータルサイト)で提供され、個人でも簡単に図表を作成することができるようになったが、自治体レベルのデータ集めは簡単ではない。特に男女共同参画は幅広い分野にわたっているので、様々な部署や機関に依頼してデータを集めなければならない。データ収集は、手間がかからず地味な作業である。それだけにこのデータ集は貴重だ。家族、仕事、女性の活躍等の7分野から北九州市の男女共同参画の状況が浮き彫りになる。全国データや政令指定都市データと比較も多用されていて、北九州市の状況を相対的に把握することができ、図には数値も記載され使いやすいものとなっている。

もちろん、欲を言えば、企業関連のデータや防災会議の委員の女性割合などもほしかったし、割合だけでなく実数が知りたいグラフもあり改善の余地はある。

しかし、最も大きな課題はこのデータ集をどのように使うか、だろう。ただ飾っておくだけでは宝の持ち腐れ。多くの人に紹介する、データ集を教材として勉強会を開くなど、大いに活用してほしいと思う。今後の展開が期待される。

なかの ひろえ  
中野 洋恵 (独立行政法人国立女性教育会館研究国際室長)

### 男女共同参画統計

「ジェンダーの視点で男女間の不平等の状況を数量として把握するため、性別区分をもつ統計」(『岩波女性学事典』)。1995年の第4回世界女性会議で採択された北京行動綱領にジェンダー統計の整備の必要性が記載されて以降、日本では『男女共同参画白書』『男女共同参画統計データブック』の発行、国連では統計部によるジェンダー統計サイトの設置、ジェンダー統計の進展のための方策や新たな統計指標の開発に関して議論する、ジェンダー統計専門企画の国連「世界ジェンダー統計フォーラム」の開催など、国内外で男女共同参画統計の充実が図られている。



■ 和田 好子 著  
■ ミネルヴァ書房  
■ 2014年初版  
■ 1,800円(税別)

古典文学に造詣の深い著者により、男と女が自由に恋をし、セックスをし、現代では禁忌とされている関係も許されている時代が活写されている。やがて武家社会となり姦通罪が導入され、貞淑こそが女の美德となっていく。このように、性愛が人間の本能に基づくものではなく、その時代、その社会の所産であることが浮かび上がる。

本書は、男女の性愛を中心に、記紀の時代から平安に至る、ゆるやかな関係を紹介し、ついで武家時代、明治時代を経て一夫一婦制の強化、さらには現代におけるその揺らぎまでを追っている。著者は、21世紀における結婚の減少と少子化を憂い、自然な男女間の付き合い方や恋愛文化を、我が国の歴史から学ぶことに主眼を置く。折しも、デートDV防止の啓発では、予防として、恋愛の「常識」や「普通」に惑わされない、相手を思いやる態度や言葉など恋愛力アップを勧めている。王朝時代の男女が種々の手段で互いの表現力を高め合う恋愛文化を、現代の若者も学ぶ必要がありそうだ。

本文中「夫としては甲斐性がない」など、夫婦の役割規範を前提とする記述があるが、これは著者が長年副編集長をつとめた、主婦投稿誌『わいふ』のスタンスなのか。ジェンダーの縛りから自由な男女のあり様を歴史から学ぼうとする本書のスタンスとの間に齟齬が生じてはいないだろうか。

とみなが けいこ  
富永 桂子 (福岡大学非常勤講師)

### 性愛

性愛は、「性本能に基づく男女間の愛欲」(大辞泉)として、一貫した性的指向性を持つ異性愛主義が前提とされた。こうした性規範が長年、非异性愛を異端として排除してきた。しかし、20カ国ほどが同性婚を認めており、この意味づけは陳腐に響く。

非异性愛は、性愛対象の性別や有無で同性愛、両性愛、無性愛などと名づけられている。米国の社会学者でジェンダー論、クィア理論の専門家 E. K. セジウツクによれば、近代西洋のゲイ男性のアイデンティティは、近代の男性の性愛に内在する非一貫性の中から構築されたという。非异性愛のカテゴリーも、近代の性規範がもたらした社会的な所産なのである。

## 男性漂流

—男たちは何におびえているか—



■ 奥田 祥子 著  
■ 講談社  
■ 2015年初版  
■ 880円(税別)

女性のジャーナリストが30代後半以上のさまざまな男性をインタビューしていくルポ。婚活に追い回されている男性にはその選択肢がない。これから生涯未婚率が大幅に上昇していくことが予想される中で、本書の紹介する問題はより深刻なものとして立ち現れるのだろう。

瀬地山 角 (東京大学大学院総合文化研究科教授)

### 生涯未婚率

日本は生涯未婚率が男性で2割、女性で1割。これはまだ増えると予想されており、みんなが結婚することが当然と考えられていた「皆婚社会」は崩壊したといわれている。皆婚社会の成立自体が高度成長期の産物で、別に日本の「伝統」が崩れるわけではないが、この「生涯未婚率」の定義をご存じだろうか?

生涯結婚しなかった人の比率を、生涯未婚率とすると、その人が死ぬまで算入できない、これでは統計上意味がないので、実は45歳から49歳の未婚率と50歳から54歳の未婚率を足して2で割ったものを50歳時点の未婚率として、「生涯未婚率」とみなしているだけなのである。

言葉は悪いが、女性には「結婚に逃げる」という手があった。実際に生涯未婚率も女性は男性の半



■ 池谷 孝司 著  
■ 幻冬舎刊  
■ 2014年初版  
■ 1,400円(税別)

本書は、十数年という長い時間、当事者やその保護者と真摯に向き合い、信頼関係を築きながら、真実を見てきた著者だからこそルボルタージュである。多くの性被害者は「信じてもらえるだろうか」という不安から相談すらできずに苦しんでいる。まして、学校の先生や部活の顧問からの性被害は、誰も信じてくれないと。著者は当事者の話を信じるところから始め、受け止め、そして当事者の被害の真実に迫っている。

本書から著者の3つのメッセージが読み取れる。1つ目は、教員が権力関係を利用して子どもに対して起こすセクハラ被害の実態がきわめて深刻だということ。2つ目は、最高責任者である校長のセクハラに対する認識が極めて低いということ。3つ目は、被害者とその保護者は二次被害に苦しんでいるということである。

セクハラが社会問題として認識されるようになって久しいが、スクールセクハラの認知度はまだ低い。その背景には、まだ教師聖職論が根づく、学校は子どもにとって安全な場所という思い込みが一般社会にある。このことが、学校でセクハラが繰り返される温床

## スクールセクハラ

—なぜ教師のわいせつ犯罪は繰り返されるのか—

をつくりだしているという。

学校の安全神話は既にはろびを見せはじめている。そのことに気づかない教育関係者や保護者、一般の人たちに、学校の教師による子どものセクハラ被害の深刻さを知ってもらいたいという著者の思いが強く伝わってくるルボルタージュである。

かめい あきこ  
龜井 明子 (NPO法人スクール・セクシュアル・ハラスメント防止全国ネットワーク代表)

### 学校の先生だから

学校という聖域で教育に携わる先生がわいせつ犯罪など起こすはずはないとする幻想。しかし実際は、先生は権力を持たされている。子どもが1日の大半を過ごし活動する学校において、先生と子どもは教える/教えられる、評価する/評価される関係にある。部活動の顧問にあってはその権威度はさらに高くなる。顧問教師は生徒の服従的な態度を信頼感や恋愛感情と錯覚しやすい。その「信頼関係」を確かめるために、性的関係を強要したり、10代前半の子どもを恋人にしてしまうことさえある。スクールセクハラは先生が教育という名のもとに権威を利用することで起る、子どもの人権を無視した暴力である。